

霊障の問題と教化活動

——法話の可能性を中心に——

岡野 忠 正

はじめに

前回の論文（『現代密教』第四号「霊障の問題への取り組みと課題」）では、地方教化研究会での討論の内容をもとに、①霊障が問題となるのは教師・寺院の宗教活動への取り組み姿勢に問題があるのではないか②ならば教化活動の展開が、霊障の問題を解決していくのではないか③しかし、なぜ教化活動をしなくていい、したくないという発言があるのか④そこには宗団の教師養成の仕方に問題があるのではないか、の四点から考えてみた。

昨年の論文批評会において、大塚講師より「現代人の不安」をキーワードに、霊障の問題を捉え直すようにとの教示をいただいた。

そこで霊障の問題を、現代人の不安という場面から考え直し、そこから寺院の活動の問題点を再考して、法話という場面で何が可能か、その場合どのような考え方が必要となるか、といった法話の可能性について考察を進める。

一、なぜ霊障が問題になるのか

霊障とは、前回提示したように「現在の家族の病気や災難などの人生・生活の諸問題が、過去からの悪なる影響力（不成仏霊など）によるものと断じ、何らかの形・手段で霊を浄化することによって、悩みや不幸から解放されようとする現象」である。このことを人間の内面的問題の表象として考察したのであるが、それが現代人の不安の内実に至っていないことを、大塚講師から指摘されたわけである。そこで、今回は「欲望」「不安」をキーワードに、霊障の問題が提示している課題を再考してみることにする。

(1) 欲望の肥大と未足

太平洋戦争の敗北は、物量的な劣勢は精神主義では覆せないことを、日本人に強烈に植え付けた。しかもアメリカ（つまりマッカーサー）の統治政策は、母国の物資が不足するほどに日本に大量の物資を送り込み、日本人に徹底した劣等感と依頼心を植え付けることを目的に展開された。アメリカから流入する生活情報が、日本人の生活の価値基準となり、アメリカ並の生活水準が国民の総意の如く目標化された。

停滞や後退を脅迫的なまでに好まない、キャッチボール的と評される（今回よりも次回は上手に、今日よりも明日はもっと良いものを作り出そうとする）国民性は、経済活動に常に前年比プラスを要求する。そのことは、資本主義体制の中で、恒常的な消費を強制し、横並びを意識する国民性の中で、常に幸福の条件が（特に物質的な面で）肥大することになった。

また高度経済成長の政策による産業構造の変化は、急激な都市化、都市社会の拡大をもたらし、村落社会がもっていた血縁・地縁の保護膜を取り去ってしまい、個人の能力を際立たせることになった。つまり幸福の条件が肥大すれ

ばするほど、個人の能力に求められることが増加し、逆に血縁・地縁は閨閥・派閥・学閥などに姿を変え、会社や職場などの小規模な社会での（自分の所属性を確認する）差別化の要素に縮小してしまったのである。つまり、一生涯に互って関係してくる保護要素（集団の中心に関わっていられる要素）が無くなり、集団に所属している間だけの、集団に所属する能力がある間だけしか機能しない保護要素を、その場その場で獲得し続けなければならなくなったのである。

このことは、幸福の条件が時事に応じて肥大したりし変化したりして、恒常化しないという状況を生み出す。常に満たされない、満たされていないという略奪感（幸福の要素が何者かによって奪われているという感覚）・不足感、つまり未足の意識の中で、外的情報（他人との比較、流行、マスコミ情報）に一喜一憂することになる。

これを構造的に見れば、民主主義的法制度と伝統的なワ（和）―話し合いの結果を正義とする精神との二重構造の生活をし、双方を統一する宗教的原理―生き方・死に方に関する共通した意識を持たないのである。したがって、自然葬を人権の問題として社会的承認を得ようとしたり、一宗派への攻撃のために新しい葬儀の方法を考案してみたりという、およそ宗教的儀礼の意味付けとは無関係な処で論争する事態が巻き起こっている。

(2) 現代人の不安と霊障

幸福の条件が肥大することは、不幸の要素が比例的に増大することでもあった。そこに、他者と同一でない、横並びの線に至っていない、または後退してしまった、病氣、不仲、倒産などの不幸や苦難を意味付けてくれるもの、つまり宗教的な機能が必要とするようになる。

しかし、家制度が崩壊し、家の宗教を持たない都市生活者にとって、その宗教的な機能を果たしてくれるのは、新宗教・新々宗教であり、マスメディアであった。それは「宗教回帰現象」と呼ばれたが、その内実は自己愛からくる

欲望（あるいは精神の防衛手段としての欲望）を呪術宗教的な世界に逃避することで充足させるといふものであった。それは、霊障という現象を通して、自分が新たに所属した集団（職場、地域など）から離脱させるような不幸を、その所属性を金銭によって解決しようとした社会現象と考えられる。（『現代密教』第二号大塚秀高論文、「教化研究」第三号—浄土宗総合教化研究所—「供養儀礼と現代」驚見定信を参照）

この事象の背景にあるものは、自己存在を確立していくための世界観、生命観の曖昧さであると考えられる。つまり自分を規定するだけの価値基準をもたない、自分の生命の預け処が不明なので、他者との比較、あるいは権威への寄り掛かりでしか自己を評価できない。そこには、近代主義からの宗教の蔑視と戦後の政教分離への過剰反応による宗教教育の不在が、あるいは科学的合理主義に対する過大な（科学によって全てが説き明かされ、宗教が不要になるという）思い込みが、人々の精神的支柱の形成を妨げてきた結果なのである。

(3) 霊障の問題が提示する課題

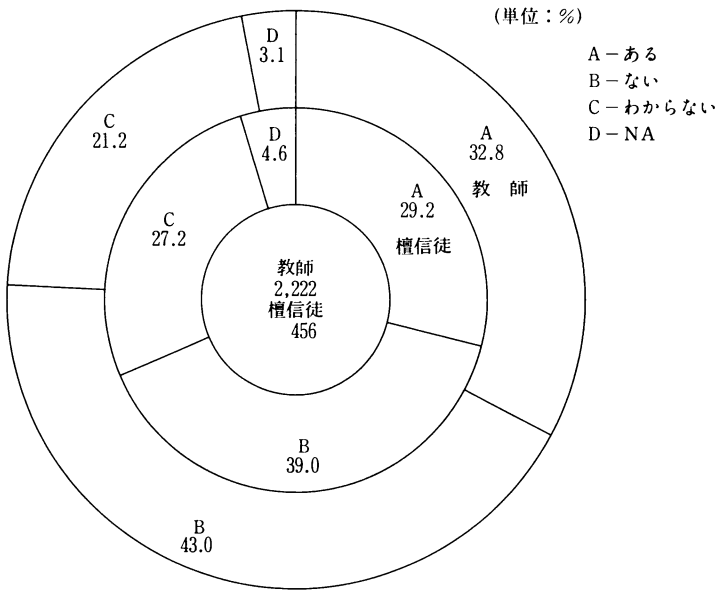
霊障の問題は、単に「霊」あるいは「靈魂」への恐怖感の表象ではなく、現代人が明確な世界観や生命観をもたない故の不安の表象であることが分かってきた。では、そこから、我々僧侶・寺院・宗団に、どんな課題が提示されてくるのだろうか。

この課題を考察するために、平成二年度実施の総合調査のデータを、我々の現状を示している資料として分析して行くことにする。

(1) 霊障の問題への意識

調査の結果を見ると、興味深い点が二つほどある。第一点は、霊障についての設問が、教師票と檀信徒票の両方にあるが、その結果が図1のように、極めて相似的なことである。

図1 霊障について



このことは、寺院活動の現場において、「霊」あるいは「靈魂」という存在が明確に、統一的に発言されていないことを表している。つまり、僧侶も檀信徒も同様に世界観・生命観の曖昧さの中にいるのである。

(四) 寺檀関係の要素

第二に寺檀関係の要素である。図2と図3に示したのは、檀徒票の「檀家になっている理由」についての回答(複数回答形式)の結果で、図2が全体傾向、図3は檀家の年数別で、サンプル数三三二の二〇%以上の件数のある「五〇年以上」と「一〇〜二九年」とを比較してみたものである。

図2の数値が作る二次関数的な曲線は、檀家は「代々檀家である」という血縁と、「墓地がある」という地縁とによって寺院と結び付いていることがわかる。これは菩提寺というものが、死後の住家であり、期待される宗教行為が死後の浄化、あるいは遺族への癒しであることを物語っている。

図3を見ると、檀家になって五〇年以上の檀家

図2 檀家になっている理由（全体）

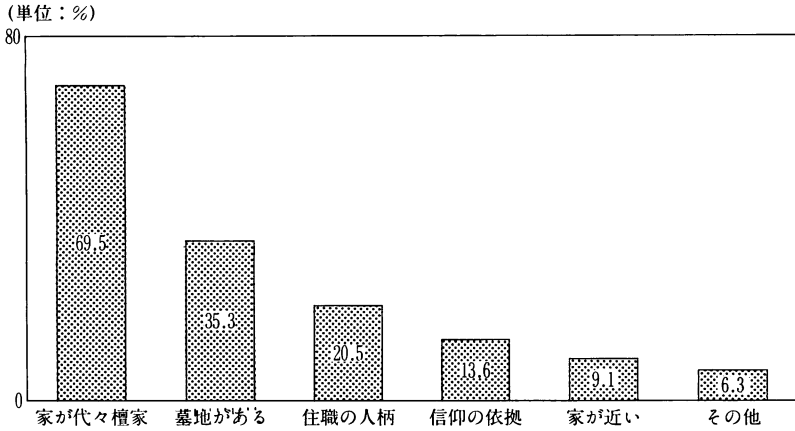
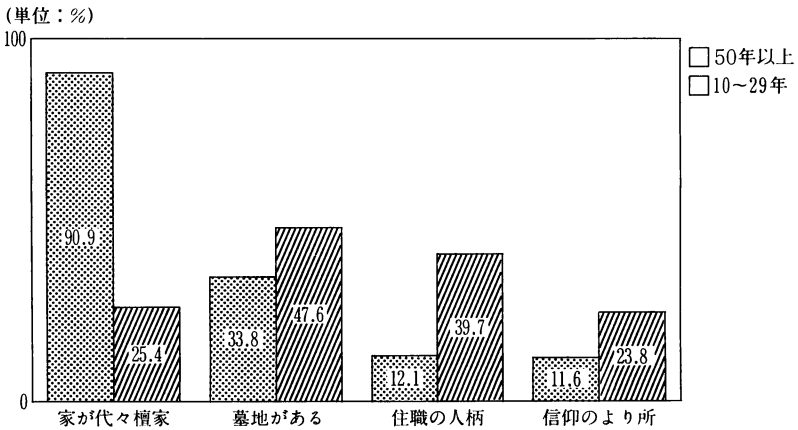


図3 檀家になっている理由—年数別



(これをA群とする)と二〇〇〜二九年(これをB群とする)の檀家との間に、意識の差異がみられる。

A群では「代々檀家」が圧倒的な数値であるが、B群では「墓地」「任職の人柄」「代々檀家」「信仰の依り所」が二〇〜五〇%の間に拮抗している。このことは、A群が家督継承的に檀家になっているのに対し、B群では自分の代から自分の選択によって檀家になったこととの意識の差異が表れていると考えられる。しかしB群の意識は、まず墓地の選定であり、その選択要素の中に任職の人柄が入っていると考えねばならない。そして、この設問には表示されていないが、もう一つの決定要素として「家の宗派と同じ」ということがある。(『総合調査集計結果』四一頁「問4 檀家になったいきさつ」参照)

(イ) 我々の課題

以上のことから考えられることは、家制度が崩壊したといわれて久しいが、人々の寺院に対する意識の中には、依然として「家」という觀念があるといえる。しかし、その家を媒体として寺院に関わるという行為は、伝統的權威への依存であり、疑似的な信仰形態ではない。つまり、ここには寺院が直接的に人々の不安を解消する存在に成り得ていないことが顕在化している。寺院が、仏教的な宗教行為と生活の仕方を提示する役目を担っているべきものであるとすると、このような宗教的無知によって引き起こされている事態は、それを見過したか、問題としなかった寺院・僧侶の大きな問題点である。

これまで、寺院・僧侶がどのような生命観、世界観を語ってきたのか。これからどのように提示していくのか。靈障の問題は、我々に問いかけている。

二、法話とは何か

法話について、これまで智山教化講習所で語られてきたこと、あるいは教化についての研究誌などで述べられてきたことをまとめてみる。

①法話の意義

◇ことばで語る―話し手の人柄、考え方、深め方、情熱が表現される

◇仏の教えを説き明かす、仏法をしゃべる

②法話の目的

◇聞き手の側の問題を解決していく

◇生活の中の具体的な実践の明示

③法話の有効性

◇話し手と聞き手の直接的なコミュニケーション

◇話し手の工夫（楽しさ、わかりやすさなどへの努力）が直接伝わる

◇聞き手（被教化者）の反応が視覚的にわかる

◇場所を選ばない―特別な資材、施設を必要としない―豊富なバリエーション

④法話の限界

◇話し言葉の限界―繰り返し聞けない、話し手の能力・聞き手の意志に左右される

◇ことばによる表現の限界―聞き手のイメージ

◇聞き手の理解の範疇を出ない

⑤つまらない、わからない、ききたくないと言われないうために

◇知識の正確さ（自信のある態度、明確な表現に結び付く）

◇テーマの明確さ（どうしてなのか、なぜやるのか）

◇心の明るさ（楽しさ、心の琴線に触れる温かさ、ぬくもり）

◇「なんだ、そうか」の効果（知らなかったことの知ってる言葉による理解）

法話は、話言葉によって被教化者に仏の言葉（世界観・生命観とそこに至る道筋、生活の実践）を訴えるわけであるから、技術的な問題を二次的に考えれば、一つ一つの事象についての考え方、深め方が一次的な問題ということになる。そこで、霊の問題について、法話が何を成し得るかを考えてみる。

三、霊の問題と法話

霊の問題に対する法話からのアプローチは、第一に霊についてどう考えるかがあり、次にどのような提案をしているのか問われることになる。

(1) 霊をどのように考えるか

霊について考えていく場合、まず「霊というものが存在するか否か」という問題がある。霊という存在が物理学的に証明されているようにとていまいが、我々は霊が存在するという前提で宗教行為を行ってきたのである。では、霊はどのような存在なのか。吉田宏哲師の示唆する所から言えば、霊は「人間の五感では知覚できない存在」であり、五感で知覚できないが故に、偶発的に見えることがあったり、特殊な知覚能力を有する者の存在があった。この霊は、

時には土地や静物に宿る神格であり、時には死者の靈魂であり、さらには如来の作用の擬人化されたものとして扱われてきた。つまり不思議な現象、作用の主体とされてきたのである。現代において問題になる靈は、主に死者の靈魂であり、日本仏教の死者儀礼の内容、作用が話題になっている。

ここで法話の前提となることは、靈というものを、宇宙的生命たる如来に包摂される個々の生命の主体として考え、悪業を浄化する行為・作用を施すことで、個性を越えた清浄なる存在に成るとすることである。

(2) どんな提案をしていくか

死者の靈を話題にする場合、宗教的行為として、何が問題にされ、何を解決していくのかを明示しなければならぬ。

このとき「日本仏教の死者儀礼は、生者も死者も大きな一つの生命（如来）の中にあると考え、靈を祟りの主体ではなく、日本的な命の主体タマシイとして捉え、輪廻していく主体とし、輪廻しないこと、あるいは浄土往生や来世での幸福を祈る、肉親の情の発露として設定されてきたのである」（『教化推進資料』—ご祈願と十三仏信仰—のまえがき）ということがヒントになると思う。

宗教的行為、この場合は死者儀礼ということになるが、日本の生命観では、死者のタマシイが怨靈となるかならないかが問題となる。現代人の不安を前提にすれば、死後の存在としての靈にどのような救いがあるのか、ということが問題になる。伝統的には、そこに十三仏の引導を想定しているわけであるが、十三仏の一々の仏・菩薩の徳を解説するだけでなく、法要の功德と参加者の祈りの行為によって、死者の靈に付着している悪業が消滅し、如来の大生命と一体となっていくことを説かねばならない。

そこから導き出されるのは、葬儀と追善廻向の功德によって如来と一体となっていく靈の有り様であり、そのこと

は我々も霊も、如来という大生命に包摂されることにおいて、個々の生命の連続の中の一存在として、共に生きていくという大きな広がりをもった生命観であり、その生命観の中で生きていこうとする提案であると思う。

むすびにかえて

現代人の不安というキーワードは、現代の寺院活動のあり方に敵しい視線を投げかけている。それは当然筆者の日常性の中に疑問を提示する。それは懺悔の念を惹起すると同時に、自己のあり方への怒りにも変化する。今回は、自分の現状から某かの提案はできないものかという衝動から、論理性を無視して書いてしまった部分が多い。紙幅の無駄遣いとこの批判は覚悟しているが、今回言及し得ていない、日本人の生命観の諸相や仏教的な生命観、世界観の精密な論及については、次回の課題とさせていたでいて、拙論の結びに代えたいと思う。